

## 雲仙岳における活動報告

派遣エキスパート	杉本 伸一（三陸ジオパーク推進協議会 上席ジオパーク推進委員（いわて復興応援隊））		
派遣先	島原市（「島原市防災避難訓練」）		
派遣日	平成 26 年 11 月 15・16 日	場所	島原市新湊避難所
参加者数	15 日：32 人（住民：宿泊体験参加者） 16 日：58 人（市職員） （訓練参加関係者約 200 人、住民参加者約 560 人）		

### 【活動概要】

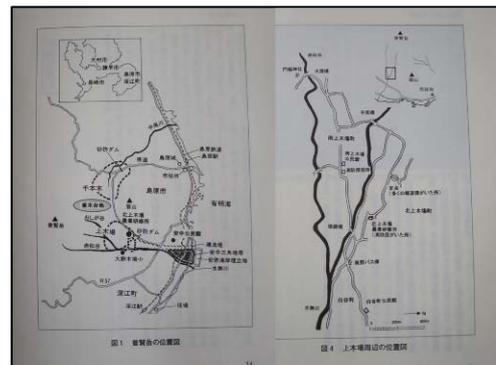
○島原市防災訓練において、11月15日は宿泊訓練を行う住民向けに「避難所の主役は住民」について講演を行い、11月16日には、災対本部・合同調整会議の開催訓練と住民の避難訓練を行う中で、行政職員を対象に、「御嶽山噴火で学んだこと」について、講演を行った。



### 【講演概要(11月15日)】

#### ■ 避難所の主役は住民

- 噴火から 24 年たち、災害から 23 年も経つ。当時、公民館に勤めていた時の上木場地区の避難について話をした。
- 安中地区のほとんどが避難勧告あるいは警戒区域となった。砂防で整備されているところは、もともとは上木場地区の住民が住んでいた。
- 土石流が流れてきたのは 5 月 15 日の深夜。センサーが反応してから 40 分後に避難した。大きな岩がごろごろと流れている中で、みんな起きて、川から離れた近くの家に避難したが、避難を呼びかけた時には、かなりの人が避難していた。安中公民館には、



いろいろな連絡が来るからと朝から公民館にいた。9時には解除され、家に帰った。5月19日にも避難勧告が出された。上木場の人は、めがね橋と呼ばれる土石流が流れる川の上を通過して避難しなければならず、第五小学校に避難するようになったが、昼には解除されるという、雨が降るたびに避難し解除されると帰るというのを繰り返していた。

- 土石流を警戒していたが、火砕流が5月26日の発生し、2名の方が負傷した。当時、高温・高速で襲ってくる火砕流はあまり危険だと認識されていなかったことが、6月3日の多数の死傷者を出してしまった。
- 杉本委員自身は、町内会長と一緒に避難誘導等を行っている消防団の動きを追っかけていたが、会長宅へ一度立ち寄ったため、タイミングがずれ、定点で火砕流に巻き込まれることなく、運よく助かった。火砕流発生後、降り注ぐ火山灰で前が見えず、事故が多く発生する中を、安中公民館まで帰ってきた。
- 上木場地区はその後、第五小学校から第三小学校、第三小学校から白山公民館と避難所を次々と変えながら避難生活をしてきた。長期避難が初めての経験だったため、誰もどうすればいいかわからなかった。
- 避難所は、場所・施設の提供を行政が行い、避難所の運営は避難者が自主的に行うことでよくも悪くもなる。東日本大震災の際の石巻市の勤労者余暇活用センターは「笑う避難所」と呼ばれていた。地震後、津波に襲われてセンターの周りを水やガレキが覆い、避難してきた136人は動きが取れなかった。センターは指定避難所でないため、市やボランティアの支援を受けられず、助け合いながら避難生活を送るしかなかったが、明確なルールはなく2日後にはトイレが詰まった。そこで、外の泥水で流すと流れたことがきっかけとなり、翌朝に避難者全員で会議を開き、「トイレを流す」「人間らしい生活を取り戻すことを目標にやっていきませんか」と唯一のルールを発表した。その日を境に避難者は自主的に自己の役割を見極め、動き出した。センターは困っている人のことを第一に考え活動していた。ある人は人脈を使い支援を呼び掛け、ある人は物資を運び続けたり、自らの役割を果たし毎日を生き抜いた。そして、彼らの間にはいつも“笑い”があった。
- 今後、火山災害や避難所生活を体験するかもしれない。そうなった場合、今日のような避難訓練の体験・経験を役立ててほしい。

### 避難所の運営

- 場所は行政が提供
- 運営は避難した人たち

避難した人たちの運営で  
どんなにもなる

### 笑う避難所

甚大な津波被害を受けた宮城県石巻市に、“奇跡の避難所”があった。石巻市勤労者余暇活用センター「明友館」である。

明友館には、地震直後から近所の住民が避難を始めていた。それから40分後、津波が襲う。ヘドロを含む真っ黒な水は、明友館にも流れ込み1階の天井近くまで迫った。明友館の周辺は、翌日になっても引かない真っ黒な水、その下には20cmほども堆積したヘドロ、そして押し流された家の残骸や車に囲まれ、避難してきた136人は、もはやどこへ行くこともできなかった。

ほかの避難所では、例えば100人の避難民に対して、50人分の食料では不平等になるから配れないといったことが日常的に起きていたときに、明友館は困っている人のことを第一に考え活動していた。

この奇跡を支えたのは、避難民として支援活動をしてきた明友館の面々である。これがまた見事に個性派ぞろいなのである。物資を各地へ運んだタクシードライバーや、物資を運び続けた気は優しく力持ちの山ちゃん、薪ストーブの火を絶やさなかった火守り・じい、物資倉庫の番人でキャンさん、電気工事のプロ・松本兄いや、ダンブ乗りの高橋さんなどなど、魅力的な大人たちが、自らの役割を果たし毎日を生き抜いてきたのだった。

そして、震災直後から彼らの間にはいつも“笑い”があった。

### 【訓練概要(11月15日)】

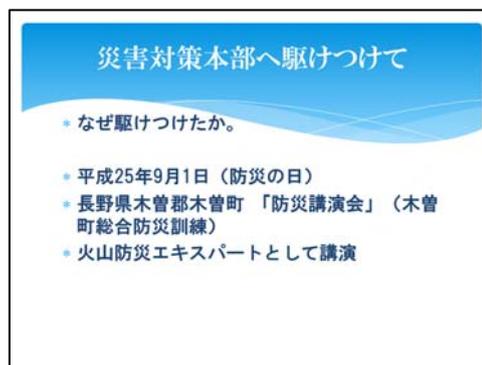
- 長期避難が可能な施設である新湊避難所にて、安中地区の住民が参加した宿泊訓練が行われた。参加者集合後、オリエンテーションを実施し、参加者に割り当てられた部屋に布団等の配布を行い、その後、防災ラジオの説明や杉本委員の講演、報道機関による避難所等に関する映像を視聴後、就寝した。翌日、朝食として、 $\alpha$ 米やカップみそ汁、保存パンといった非常食を試食し、宿泊訓練は終了した。
- 新湊避難所は、火山災害等の長期避難を行うことを目的とし、炊事場・シャワー室・洗濯室・洗面所・トイレといった設備を完備している。各部屋は広さが6～8畳ほど、床が畳やフローリングになっており、コンセントやエアコンも完備されていた。



### 【講演概要(11月16日)】

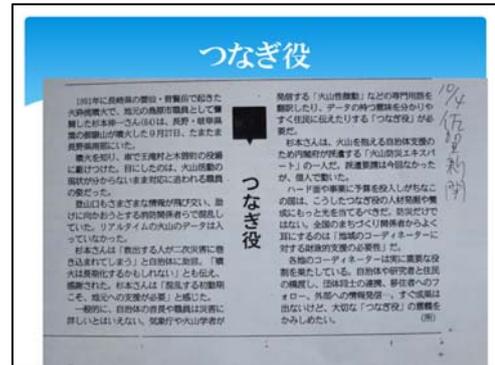
#### ■ 御嶽山噴火で学んだこと

- 御嶽山噴火当時、長野県伊那市のジオパークの全国大会の会場で、開会式後に噴火を知った。
- すぐ、木曾町に行ったが、役場の駐車場は静かだった。役場の中では、テレビを見て情報収集をしていた。そこで、さらに御嶽山に近い王滝村に行き、村長と会った。村長は「登山客はいたが、状況は分からない」と言っていた。火口3km内に現地災害対策本部があり、そこへ村の許可をもらい向かった。現地災害対策本部でも対応ができず、下山してきた人や既に死者が出ていると言っていた。
- 火山がどういう状況かわからず、どう対応すればよいかわからない状況だった。役場に戻り、気象庁の人と話したが、携帯電話に1時間に1回地震情報が入るだけで他の情報は分らなかった。
- 村長には、「情報のコントロールが必要」「対



応は長期化する」と伝えた。

- 発災から 24 時間は自治体での対応が必要だと感じた。
- 気象庁は火山解説情報を出したが、自治体には届いていなかった。自治体職員は、気象庁や国交省、専門家などから出される専門的な情報を正しく理解し、伝えることが必要で、専門家などと日ごろから話しておくことが必要である。



## 【訓練概要(11月16日)】

### ■ 訓練想定

- 11月16日(日)未明、島原市において、有明海を震源としたマグニチュード6、震度4の地震が発生した。
- 島原市は、直ちに災害警戒本部を設置し、被害状況の確認を開始した。
- 16日 午前5時、国土交通省雲仙復興事務所から「雲仙普賢岳の溶岩ドームの変位速度に変化が見られ、事後、嚴重な監視が必要である。」と災害警戒本部に連絡がなされた。
- また、国土交通省雲仙復興事務所は、引き続き監視を継続するとともに、有識者による会議を開催。
- 島原市は、引き続き、被害状況を把握するとともに、雲仙復興事務所からの情報により災害警戒本部から災害対策本部に切り替え、防災体制の強化を図った。
- 16日 午前7時、国土交通省雲仙復興事務所開催の有識者による会議（以下「有識者会議」という）の中で、「住民を避難させたほうが良い」との結論が出され、災害対策本部に伝えられた。連絡を受けた島原市は、安中地区の住民に対し午前9時45分に避難勧告を行うと共に、県に対し自衛隊への災害派遣を要請した。
- 16日 午前9時50分、震度4（2回目）の地震発生があり、有識者会議の中で「更に、溶岩ドームの変位速度に変化が見られ、いつ崩落してもおかしくない状態であり、直ちに住民の避難が必要である。」との結論が出され、災害対策本部に伝えられた。
- 島原市は、被害の拡大がさらに予想されるため、午前10時に安中地区の住民に対し避難指示を行い必要な防災対策を講じることとした。

### ■ 島原市災害対策本部会議開催訓練

- 災害対策本部会議において、火山状況の確認、防災対応状況の確認などを行い、避難勧告の判断までのプロセスを行った。

### ■ 関係防災機関合同調整会議開催訓練

- 各防災関係機関が一堂に集まり、復興事務所からの溶岩ドームの状況確認、観測

状況、各関係防災機関の対応状況などを確認した。

■ 安中地区住民避難訓練

- 一次集合場所の島原市立第五小学校から、島原市新湊避難所まで避難する訓練が行われた。徒歩で移動が可能な住民は、消防団の誘導により新湊避難所まで移動し、徒歩での移動が困難な住民は、自衛隊車両によって避難所まで移動した。

